HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 日本と中国の遠隔交流が創出する質的価値の探求 |
| Author(s) | 杉江, 聡子 |
| Citation | 中国語教育, 15, 105-123 |
| Issue Date | 2017-03-31 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/65131 |
| Type | journal article |
| File Information | JJACLE15_sugie.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

—論文

# 日本と中国の遠隔交流が創出する質的価値の探究

杉江聡子

(北海道大学)

**提要**

随着信息化与全球化的发展，活用ICT方法的外语教学实践及其教学质量保证的课题逐渐引起关注。但在华语教学研究中，以知识积累型教学为基础，统计测量教学效果的定量研究范式仍占主导。本研究独创设计了中日远程交流混合式学习模型，基于两国学生的自我评估，探讨比较学生对教学成果认识及价值评价的异同。其中，为了明示分析程序和概念解释，引进了质性研究方法SCAT（大谷，2008，2011）。同时，为了便于理解和探讨分析结果,应用混合研究法（Creswell，2015）的手法尝试了对分析结果的可视化。研究结果发现了以下的共通点：(1)基于学生需求设定的交流主题获得了高评价；(2)学生对课外远程交流的兴趣很高；(3)远程交流经历对学生的心智产生积极作用；(4)学生感觉到了利用远程交流的学习模型的积极意义。而不同点在于，日方学生对交流活动本身感到喜悦和满足，而中方学生对灵活运用日语、恰当地表达想法的期待更高。

**キーワード：ICT、遠隔交流、質的データ分析、混合研究法、統合的解釈**

## 1. 研究の背景と目的

中華文化圏からの訪日外国人観光客の急増、中国語人材に対する社会的ニーズの高まり、教育情報化に伴うICT活用教育・学習と質保証に対する関心がある中で、中国語教育の現場では知識蓄積型の教育実践と、量的研究による教育効果の検証を重視する従来のパラダイムから脱却できていないという課題が残されている。この課題を解決する方略のひとつとして、母語話者を相手とする遠隔交流を活用し、真正なコミュニケーション文脈や異文化間交流を体験するこ

と、対話を中心とする協調学習による問題解決を通じて学習した知識と訓練した技能を言語使用の実践と積極的に連携させることをねらいとしたインストラクショナル・デザイン（instructional design:以下、ID）やブレンド型学習（blended learning：以下、BL）モデルの検討が急務である。しかし先行研究では、遠隔交流を活用したブレンド型学習の事例が少なく、高等教育機関における実践に関する量的研究（砂岡，2009，2011）が主流であった。高校での実践（城間，2013）は質的側面に触れた事例研究に留まり、学習成果の評価指標や質的データ分析の方法論を検討する余地が残されている。特に、高校の第二外国語としての中国語では、適切なIDを設計し、ICTを活用した対面交流を実現する継続的な遠隔交流を実践した上で、その成果を質的研究の方法論に基づき評価する探索的研究が不足している。そこで筆者は、高校のフィールドに適したICT活用の中国語教育・学習のためのIDを設計し、中国語母語話者との対話を核とする遠隔交流を活用したBLによって、学習意欲にどう影響するかという態度や認識の変化を知ること、また、BLの過程で獲得される経験、成果及びその価値を探究することを目的とした実践研究を行った。その結果、「学習者視点の評価」、「遠隔交流のインタラクション経験」、「教育的観点からの評価」に基づく3つの価値が創出され、BLの有効性が明らかになった（杉江，2016）。しかし、これは日本人学習者の視点に基づく中国語授業に対する評価であり、交流相手である中国側の視点は反映されていないため、遠隔交流の経験と価値を両国の視点から探究する余地が残されている。そこで本稿では、BLに含まれる学習プロセスのうち遠隔交流に焦点を当て、日本と中国の参加者の評価に基づき、認識した成果や価値について概念を整理、解釈して比較し、類似点と相違点を探究することを目的として、アンケートの集計、質的データ分析に基づく統合的解釈を行った。

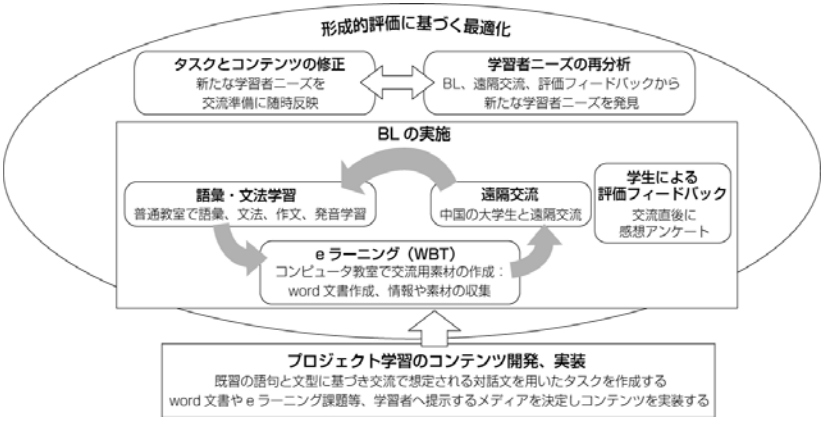
## 2. 研究方法

### 2.1 遠隔交流を活用したブレンド型学習モデル

遠隔交流を活用したBLを中心に、学習の過程で形成的評価を繰り返しながら教師と学習者が共同で学習活動を改善していく螺旋型ID

を設計した。BLモデルは、語彙・文法学習、ｅラーニング、遠隔交流の3形態から構成し（図1）、遠隔交流に向けて語彙・文法学習とｅラーニングの授業で準備を整え、放課後に実施する遠隔交流で中国人学生とのインタラクションを体験するというサイクルを反復的に実施した。遠隔交流は、2地点間の同期型交流を年間9回行った。本稿では、BLモデルを構成する3つの学習形態のうち遠隔交流に対する日本と中国の参加者の評価を分析の対象とする。

図1 遠隔交流を活用したブレンド型学習モデル




## 2.2 データ分析の方法論

アンケート（5件法）の回答を集計すると共に、自由記述の質的データ分析を行った。年間9回実施した継続的な遠隔交流の経験に基づき創出された成果とその価値を探究するために、SCAT（Steps for Coding and Theorization）（大谷, 2008, 2011）を用いて質的データ分析を行った。SCATは、グラウンデッド・セオリーを中心とする質的研究の理論に基づき開発された質的データ分析のためのステップ・コーディングと理論化の手法である。質的データ分析は分析者の経験や主観に基づき行われるため、手続きの不透明さや解釈の恣意性が指摘されるが、SCATは分析の手続きと解釈の過程が明確になり、小規模データにも適用できる。分析のプロセスでは、具体的な

テクストをコーディングして概念整理した上で、その解釈に基づき再文脈化、理論化、更なる課題の検討を行う。本研究は1年間のみ実践した遠隔交流を分析の対象とするため、概念整理、再文脈化、理論化の内容を中心に検討する。なお、中国側の中国語による回答については、コーディングの過程で日本語訳した上で解釈する。

さらに、アンケート回答の集計（数量データ）と自由記述（質的データ）から得られた結果を統合的に解釈し、混合研究法の手法（Creswell, 2015）を用いて図表に示す。本稿では、量的研究で通常用いられる統計的検定は行っていないが、数値データと質的データという性質の異なる2種類のデータに基づく分析結果を捉えやすくするのにこの手法が有効であると判断した。数値データからは尺度の得点の違いを、質的データからは日本と中国それぞれの概念、共通点、相違点に基づく解釈を分析して図示する。

## 3. 遠隔交流の実施方法

遠隔交流のトピックは、学期開始時に事前アンケートを実施して日本と中国の参加者の希望に基づき設定した。第1・2回「あいさつ、自己紹介」、第3・4回「日本の高校生活（グルメ、学校行事、芸能、流行、インターネット）」、第5回「学校祭」、第6・7回「夏休みの思い出」、第8・9回「中国からの質問（日本のニュース、北海道の特色、高校生活、娯楽、卒業後の進路）」となった。参加者は、中国語学習暦2年目の日本の高校生（3年生、7名）と日本語専攻の中国の大学生（2年生から4年生、15名）である。遠隔交流の形態は同期型のビデオチャットであり、状況に応じてテキストチャットや音声チャットも併用した。日本側は2名から4名のグループに分けて毎回交代で割り当て、中国側は1名から数名のグループで学期開始時に交流日時を決めて配置した。日本側は、語彙・文法学習とeラーニングによって、トピックに合わせて話したり質問したりしたい内容に関する語彙や表現を学習した上で、自由作文による原稿を作成し、写真や動画等の交流素材を準備した。ICT環境はパソコン（マイクとWebカメラ内蔵）とインターネット通信環境である。日本側は高校のネットワークセキュリティの制限により学内のインターネット環境

は使用せず、Wi-Fi高速モバイルデータ通信を教師が契約して使用した。中国側は学内の有線ブロードバンド接続であった。通信用アプリケーションは主にQQを使用し、通信状況に応じてSkypeに切り替えた。交流の時間と場所は、高校の放課後（日本時間で午後4時から6時）に、日本側は非常勤講師室、中国側は学生寮の寝室で実施した。

図2 遠隔交流の様子（左は中国、右は日本）

6人部屋ベッドや行き来して声をかけるルームメイト等、大学生活のリアルを感じられる

学校祭クラスTシャツの実物を着用して見せながら紹介

## 4. 質的データ分析の結果

BLモデルの中心的な活動である遠隔交流に焦点を当て、日中双方の参加者の評価に基づき、認識した成果や価値についての概念を整理、解釈、比較することを目的として、アンケート回答の集計と質的データ分析を行い、統合的解釈を図表で示す。学年末アンケートの質問は、5件法4問と複数選択1問（自由記述を含む）の5項目（表1）を設定し、日本側7名、中国側7名の回答をオンラインアンケートによって収集した。

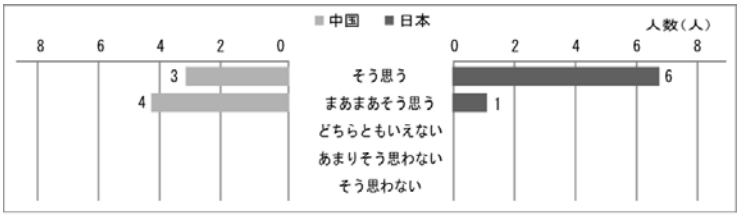
表1 遠隔交流に対する評価アンケート

| | |
|---|---|
| 問1 | 遠隔交流のトピックに興味が持てましたか？ |
| 問2 | 授業以外にもオンライン交流をしたいですか？ |
| 問3 | オンライン交流で、どのような気持ちになりましたか？該当する項目をすべて選択してください。また、そのように答え |

| | |
|---|---|
| | た理由を教えてください。 |
| 問4 | オンライン交流は自分にとって意味がありましたか？また、どのような点で意味があった／なかったと感じたのか具体的に教えてください。 |
| 問5 | オンライン交流によって、語彙・文法学習やCALL授業だけでは得られない学びがありましたか？また、そのように答えた理由を教えてください。 |

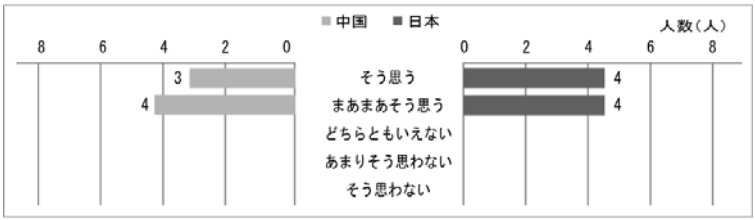
問1では、日本側6名と中国側3名が「そう思う」、日本側1名と中国側4名が「まあまあそう思う」と回答した。参加者全員が遠隔交流のトピックが交流に興味を持ち、交流に適切な内容であると認識していることがわかる。

図3 遠隔交流のトピックに対する興味・関心




問2では、日本側4名と中国側3名が「そう思う」、日本側4名と中国側4名が「まあまあそう思う」と回答した。参加者全員が遠隔交流の形態に興味を持ち、肯定的に受け入れていることがわかる。

図4 授業外での遠隔交流に対する興味・関心

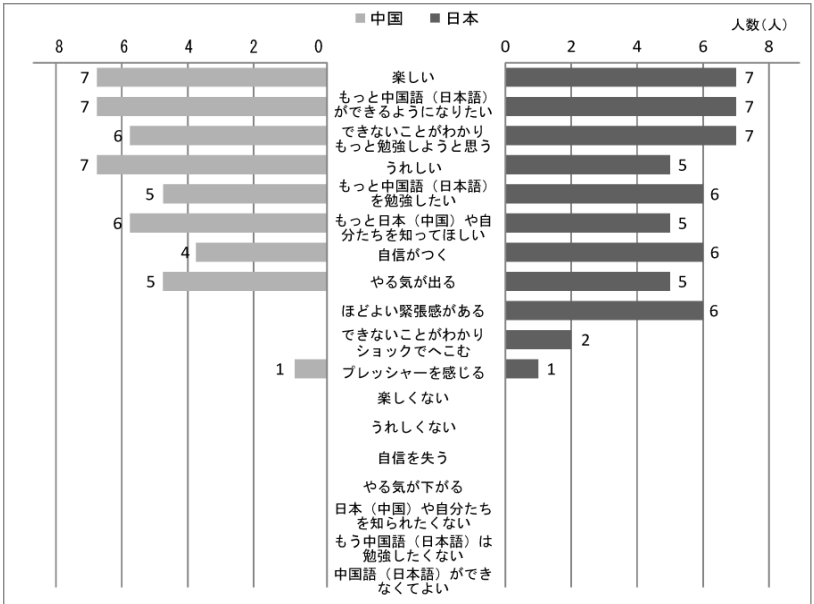


問3では、遠隔交流が学習者の心情や態度にもたらす具体的な変化が明らかとなった。「楽しい」、「もっと中国語（日本語）ができるようになりたい」は日本側と中国側ともに7名、「できないことが分かりもっと勉強しようと思う」は日本側7名と中国側6名、「うれしい」は日本側5名と中国側7名、「もっと中国語（日本語）を勉強したい」は日本側6名と中国側5名、「もっと日本（中国）や自分たちを知ってほしい」は日本側5名と中国側6名、「自信がつく」は日本側6名と中国側4名、「やる気が出る」は日本側と中国側ともに5名、「ほどよい緊張感がある」は日本側6名、「できないことが分かりショックでへこむ」は日本側2名、「プレッシャーを感じる」は日本側と中国側ともに1名となった。「楽しくない」、「うれしくない」、「自信を失う」、「やる気が下がる」、「日本（中国）や自分たちを知られたくない」、「もう中国語（日本語）は勉強したくない」、「中国語（日本語）ができなくてよい」というネガティブな認識は見られなかった。

回答の理由について質的分析を行った結果、日本側は遠隔交流の機会を喜び、対話を楽しみ、遠隔交流の経験を蓄積する中で新しい知識や語句を獲得し、実践的な会話表現を活用して自信を獲得することで、中国語学習のモチベーションが向上していったことがわかる。一方で、知識や技能不足によるコミュニケーションの困難を実感し、時にショックを感じて「へこむ」ことがあり、うまくコミュニケーションできるかどうかわからない状況に緊張や不安を感じていた。しかし同時に、相手に自分たちのことをもっとうまく伝えたいという気持ちから知識や技能の習得に対する向上心を高め、真正なコミュニケーション場面における適度な緊張感を持って交流を重ねることで、課題克服の喜びや少ない資源を最大限活用し、コミュニケーションが成立する喜びを感じていた。コミュニケーションの困難を感じ、失敗にショックを受けてもそこで立ち止まらず、次への課題意識や学習モチベーション向上へ転化させていたことが見て取れる。中国側は、遠隔交流というリアリティのある交流を経験することで、日本語会話能力向上や流暢な日本語運用技能習得に対する意欲が高まり、日本語学習モチベーションが向上した。また、ビ

デオチャットに対する新鮮な喜びを感じると共に、日本側に対する好印象と親近感が向上し、同年代の日本人の生活に対する興味関心も深まった。中国の大学では日常的に教師と学生の上下関係の厳しさの下で学習しているため、同年代どうし気楽なトピックについて話せる環境に満足したことがわかる。

図5 遠隔交流による学習者の心情・態度の変化




中国側は、遠隔交流を通じて、日本語運用技能の向上を目標化し、モチベーションが向上した。ビデオチャット交流は新鮮な体験であり、日本に対するポジティブな感情と興味が高まった。上下関係を感じない気楽さも功を奏した。

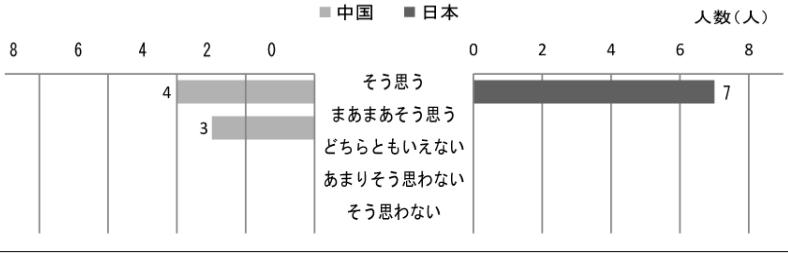
日本側は、遠隔交流の機会を喜び、対話を楽しみ、遠隔交流の経験を蓄積する中で新しい知識や語句を獲得し、実践的な会話表現を活用して自信を獲得した。同時に、中国語コミュニケーションに対する不安や緊張があり、失敗経験を経て知識と技能の不足を痛感し、課題克服に向けた反省が生まれた。成功と失敗の両方が中国語学習のモチベーション向上につながった。

共通点：
・遠隔交流そのものが新鮮な体験であった。
・対面交流の喜びと満足を感じた。
・交流相手に対する理解が深まった。
・学習モチベーションが向上した。

相違点：
・日本側が学習した中国語を実際に活用したコミュニケーションの成功体験により自信を獲得したのに対し、中国側は自信の変化について言及していない。
・日本側が中国語コミュニケーションの失敗体験から課題を認識し、その克服を目標化したのに対し、中国側は失敗体験による影響について言及していない。
・中国側が大学での教師と学生の上下関係とは異なる同年代の日本の若者との自由な気楽な雰囲気からコミュニケーション意欲を高めたのに対し、日本側は教師との関係を意識せず、ネイティブとのリアルな対話に際して不安や緊張を感じた。

問4では、日本側7名と中国側4名が「そう思う」、中国側3名が「まあまあそう思う」と回答した。参加者全員が遠隔交流の学習形態に積極的な意味づけをしたことがわかる。回答の理由について質的分析を行った結果、日本側は日常的に中国語母語話者との対面交流の機会がないため、異文化理解の貴重な経験をしたという経験そのものに価値を見出し、ネイティブの中国語に直接触れる経験が強いインパクトをもたらし、中国訪問や中国語上達に対する意欲が高まった。また、同期的に直接対面するというリアルな対話を通じて中国語運用技能の不足を実感し課題として認識すると同時に、交流相手の友好的な態度に励まされてコミュニケーションを成立させることができ、中国に対する親近感や興味・関心が向上した。交流の過程で教科書の定型文だけではなく実践的な会話表現を新たに学び、自分と関連のある内容についてのコミュニケーションで活用できたことで、「使うために学ぶ」という外国語学習本来の意義を実感し、中国語学習のモチベーションを向上させたことがわかる。中国側は日本語専攻の大学生であり、卒業後は日本語を活かした就職を強く希望している。また、中国社会の情報化が発展しており、PCやインターネットは日常生活に必要不可欠となっている。そのため、ICT活用技能と日本語会話能力の両方が就職に必須のスキルであると感じており、ICTを活用した遠隔交流の形態で、日本語母語話者の言語運用を体験しながら適切な日本語表現を学習できる環境を実現した実用性の高さを肯定的に評価したことがわかる。

図6 遠隔交流の意味づけ




| 中国側は、日本語専攻の大学生であり、情報化が進む中国社会における就職のためには、ICT 活用と日本語会話能力の両方が必要不可欠であると感じている。そのため、ICT を活用しながら日本語母語話者との交流を通じて日本語を学習できる遠隔交流の実用性を肯定的に評価した。 | 日本側は、普段機会のない中国語母語話者との対面交流と異文化理解の貴重な経験に価値を見出し、対話を通じて中国訪問や中国語上達の意欲が高まった。中国語会話能力不足という課題に気付くと共に、中国側の友好的な態度から、親近感や興味関心が強化された。授業で学習した内容や実践的な会話表現を実際のコミュニケーションで活用するという外国語学習の意義を見直し、学習のモチベーションを向上させた。 |
|---|---|

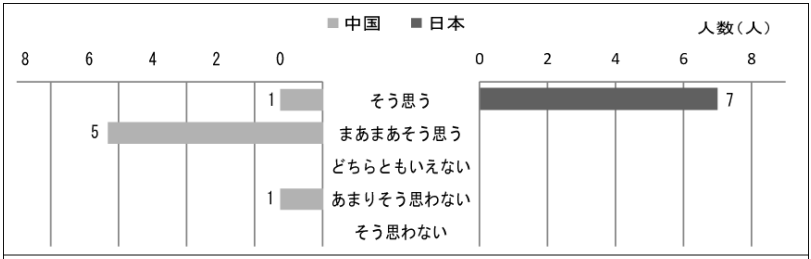
共通点：
・学習した外国語の知識や訓練した技能を母語話者との会話実践で活用できる学習環境に意義を見出した。

相違点：
・日本側が対面式の異文化間交流そのものを楽しめる貴重な体験として価値づけたのに対て、中国側は就職を想定した実用的な技能訓練の場として価値づけた。
・日本側は交流相手のコミュニケーション態度に支援されて情意面の変化が起きたのに対して、中国側はこの側面について言及していない。
・日本側は失敗体験を通じてセルフモニタリングによる課題認識と克服に向けた学習モチベーション向上があったのに対して、中国側はこの側面について言及していない。

問5では、日本側7名と中国側1名が「そう思う」、中国側5名が「まあまあそう思う」、中国側1名が「あまりそう思わない」と回答した。回答の理由について質的分析を行った結果、日本側は実際に中国語母語話者と対面交流することで、ネイティブの中国語を聞きながらコミュニケーションする会話実践の経験に満足したことがわかった。また、交流相手の人柄や友好的な態度、興味関心や話題の嗜好を知る貴重な機会として遠隔交流の価値を認識していた。授業で語彙・文法・定型文を個人学習するだけではなく、学習した中国語を実際の交流で積極的に活用することで、知識と経験が有効に結び付き、コミュニケーション成立の喜びを感じたことがうかがえる。中国側は、ICTと日本語学習のリソースを活用し、学習した日本語を実際の交流で積極的に活用し、失敗体験から誤りを修正しな

がら日本語を習得できる遠隔交流を通じて、円滑なコミュニケーション能力を獲得できると認識していた。また、日常生活の中で日本語母語話者とコミュニケーションをとる機会がないため、日本の学生と直接対面交流する機会を希望していた。中国の大学では教師と学生の上下関係が厳しいため、同世代の若者どうし話が合う気楽な雰囲気についても肯定的に評価していた。しかし、学習者のニーズに基づき設定した話題が日常会話の範囲に限られたため、語彙の向上や新たな知識の獲得はないという、実利につながる効果の面で物足りなさも感じていた。

図X 遠隔交流ならではの学び




中国側は、学習した知識やリソースを積極的に活用し、日本人との交流を通じて失敗から学ぶことで、コミュニケーション能力が向上すると認識した。交流の機会が少ない同世代の日本人と直接対面交流を希望し、対等な若者どうしの気楽な雰囲気を好ましく感じた。しかし、日常会話の域を出ない話題は語彙習得に貢献せず、実利の少なさに不満を感じた。

日本側は、対面交流を通じて、中国語母語話者との実践的な中国語コミュニケーションを経験し、学習した知識を積極的に活用したコミュニケーション成立を喜んだ。遠隔交流は、交流相手のコミュニケーション態度、興味や話題の好みを知る価値ある貴重な機会となった。

共通点：
・ICT 活用の遠隔交流によって、普段接することのない母語話者との会話実践を通じて、学習した外国語を積極的に活用する機会が実現した。
・同世代の若者同士話が合い、コミュニケーションの成立を喜んだ。

相違点：
・日本側が中国語を用いたコミュニケーションの成功体験に満足したのに対して、中国側は円滑なコミュニケーションを目指した技能習得まで期待していた。
・日本側が交流相手個人の態度、興味、嗜好を知ることに価値を見出したのに対して、中国側は対面交流から得られた具体的な発見については言及していない。
・中国側が現在の習得度に基づく実利や目標達成を期待し、交流で実現しなかったことに不満を感じたのに対して、日本側はそこまでの要求について言及していない。

## 5. 考察と結論

遠隔交流のトピック及び授業以外の遠隔交流に対する意欲については、日中双方の共通認識として、同世代の若者どうし共通の話題

に基づく遠隔交流の学習形態に関心が高く、プライベートやインフォーマルラーニングとして展開する可能性がある。本実践は、高校は授業時間外に学内で、大学は授業のない自由時間に寮の部屋で実施した。特に、教師と学生の上下関係が厳しく、学習量や時間のプレッシャーが強い中国側にとっては、教師の監視下で必修課題を黙々と遂行するのとは異なり、カジュアルな環境で自由に会話できたことから、リラックスした心情が形成され、学校内とは異なる質の学びが実現したといえる。しかし、BBSやeメールを用いた自律的なオンライン交流は、往々にして長続きせず自然消滅してしまうことが多く、インフォーマル・ラーニングに遠隔交流を活用するには、緊張感と学習者主体の自由で気楽なリラックス感のバランスに配慮した学習環境のデザインを検討しなければならない。

遠隔交流による学習者の心情・態度の変化については、日中双方の共通認識として、ポジティブな情意面の影響があることがわかった。共通点としては、(1) 学習する外国語の母語話者を相手とした遠隔交流そのものが新鮮な体験であったこと (2) 対面交流の喜びと満足を感じたこと (3) 交流相手に対する理解が深まったこと (4) 学習モチベーションが向上したことが挙げられる。相違点としては、(1) 日本側が学習した中国語を実際に活用したコミュニケーションの成功体験により自信を獲得したのに対し、中国側は自信の変化に関する認識はなかったこと (2) 日本側が中国語コミュニケーションの失敗体験から課題を認識し、その克服を目標化したのに対し、中国側は失敗体験による影響をさほど認識していなかったこと (3) 中国側が大学での教師と学生の上下関係とは異なる同年代の日本の若者との自由で気楽な雰囲気によってコミュニケーション意欲を高めたのに対し、日本側は教師との関係よりもネイティブとのリアルな対話に際して不安や緊張を感じていたことが挙げられる。

遠隔交流の意味づけについては、日中双方の参加者がこの学習形態に積極的な意義を見出したといえる。共通点としては、学習した外国語の知識や訓練した技能を母語話者との会話実践で活用できる学習環境が挙げられる。相違点としては、(1) 日本側が対面式の

異文化間交流そのものを楽しめる貴重な体験として価値づけたのに対して、中国側は就職を想定した実用的な技能訓練の場として価値づけたこと（2）日本側は交流相手のコミュニケーション態度に支援されて情意面の変化が起きたのに対して、中国側はこの側面に言及していないこと（3）日本側は失敗体験を通じてセルフモニタリングによる課題認識と克服に向けた学習モチベーションの向上が見られたのに対して、中国側はこの側面に言及していないことが挙げられる。

遠隔交流ならではの学びについて、日本側と中国側の評価が分かれたのは、外国語習得レベルの差と交流に対する期待の相違があったためと考えられる。共通点としては、（1）ICT活用の遠隔交流によって、普段接することのない母語話者との会話実践を通じて、学習した外国語を積極的に活用する機会が実現したこと（2）同世代の若者同士で話が合い、コミュニケーションの成立を喜んだことが挙げられる。相違点としては、（1）日本側が中国語を用いたコミュニケーションの成功体験に満足したのに対して、中国側は円滑なコミュニケーションを目指した技能習得まで期待していたこと（2）日本側が交流相手個人の態度、興味、嗜好を知ることに価値を見出したのに対して、中国側は対面交流から得られた具体的な発見には言及していないこと（3）中国側が現在の習得度に基づく実利や目標達成を期待し、交流で実現しなかったことに不満を感じたのに対して、日本側にはそこまでの要求がないことが挙げられる。

今回の交流相手の大学は、日本人留学生が少なく、日本人講師と授業で接する機会はあるものの、同世代の若者どうし気さくに語りあうような日本語運用の機会がない環境であった。高校側も、日常生活で中国人母語話者と交流する機会がない上に、日本人講師が授業を担当していることから、学習した中国語を母語話者相手に活用してみたいという素直な欲求があった。そのため、双方が母語話者との異文化間交流そのものを貴重な経験として価値づけ、自分自身と関連する真正なコミュニケーション文脈においてリアルなインタラクションを体験したことに満足し、コミュニケーションの成功体験や失敗体験を蓄積する中で、知識や技能の不足を痛感しながらも、

和気あいあいと語りあうことで、ポジティブな感情が形成され、学習モチベーションが向上したといえる。大学と高校というアンバランスなペアリングではあったが、高校生ならではのインタラクションが行われた場面もあった。高校の制服や学校祭Tシャツを実際に見た中国側が大いに興奮し、ファッションショーのように立ち姿や後姿をカメラに映して見せてほしいと要求し、「かわいい」「うらやましい」と感想が出され、すぐに中国の制服（学校指定の運動着、ジャージ）を探して着て見せ、「おばあさんの服のようで嫌い」と不満をこぼす場面も見られた（杉江，2016）。このようなインタラクションは、偶発的な状況を楽しみながら中国語と日本語でコミュニケーションを成立させる経験を伴うものであり、事前に計画された授業からは発生し得ない、同期的な遠隔交流ならではの成果といえる。

一方で、中国における進学や就職のプレッシャーは日本よりも厳しいことから、大学入試と直結しない高校の第二外国語として中国語を自由意志で選択している日本側と、中国の大学で日本語を専攻し、就職を少しでも有利にするために必死に能力検定や留学への道に挑戦している中国側では、モチベーションの質も高さも異なってくる。日本側が中国語を活用して交流相手について知ることや、中国の大学生が日本語を熱心に学び日本について知ろうとしている態度に感動して中国語学習のモチベーションを高めたのに対して、中国側は、実利としての知識や技能の実践の場として利用し、円滑なコミュニケーションにつながる日本語運用技能の習得を目標として、それにつながる成果に満足し、つながらない結果には不満を覚えていた。このような社会的背景や環境の前提を反映した結果、上記の共通点と相違点が浮上したといえよう。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、遠隔交流を活用したBLモデルに含まれる3つの学習プロセスのうち遠隔交流に焦点を当て、日本と中国の参加者の経験と評価に基づき、認識した価値について概念を整理、解釈して比較し、類似点と相違点を探究することを目的として、アンケート回答の集

計、質的データ分析及び概念の可視化を試みた。分析の結果、遠隔交流を活用した学習形態は、ICT活用技能と母語話者との対面交流を実現する外国語学習環境として、日中双方の学習者に共通して質的に有効な側面があることが明らかとなった。また、日中の学習環境や社会背景の違いから、何を実利とするか、どのような経験から学習の成果を認識して満足や不満を感じるかという相違点も浮上した。

遠隔交流や多国間のプロジェクト学習を行う場合、参加者それぞれにとってのメリット、学習の目的、到達目標等を考慮してIDを設計する必要がある。本実践からは、満足した点のみならず不満を感じた点も明らかとなり、今後の授業設計のための有益な示唆が得られたといえるだろう。例えば、日本の高校生が交流活動そのものを楽しみ、相手を知ることや自分たちを知ってもらうことを重視するなら、より具体的に内容を伝え合うためのツールや手法を用いて、1つのテーマについて時間をかけて深く交流することが望ましい。同じ内容でも相手が変われば異なるインタラクションが生まれ、様々な意見や個性が実感され、異文化体験の意義が深まる。外国語習得の面でも真正なコミュニケーションの経験を蓄積することで知識や技能の定着が促進されるだろう。また、中国の大学生が日本語学習において就職活動に有利となるような実利を重視するのであれば、高校生だけではなく、同じ就職活動を控えた大学生、企業の採用担当者、企業内で中国語を必要とする学習者等を交流相手とし、ビジネス場面での交流活動に関連したタスクを設定することも検討できる。双方の言語運用技能レベルの差がある場合でも、中国側から日本側に対して現代日本の社会現象や伝統文化を表す概念や語彙について質問させ、その回答を日中両言語で行うなどして、調べもの協調学習、異文化間理解、外国語学習の組み合わせを取り入れれば、双方にとって満足いくタスクを検討できる。

今後の発展の方向性として、遠隔交流を取り入れたインフォーマル・ラーニングが考えられる。学習者まかせで自然消滅しがちな自律的学習を、緊張感とリラックス感のバランスに配慮した学習環境によって支援する必要があり、そのための方略として、交流トピックや交流相手が固定化してワンパターンにならないような変化を持

たせ、学習者にとっての新規性を維持できるIDの工夫が必要である。参加者双方にとってのメリットに配慮すると共に、対話や交流の体験そのものが持つコンサマトリーな価値を重視して実践を継続し、学習者にとっての学びの質を継続的に探究する必要があるだろう。

ICTを活用した学習者主体の学びを実践しようとする時、従来とは異なる学習目的、学習環境設計、学習ツール、学習プロセス等が選択される。学習支援としての教育の過程で創出される経験や成果も新しいものとなる。当然、その評価や価値付けも新たな視座から、新たな手法で検討する必要が出てくる。これまで自然科学のパラダイムで確立されてきた課題意識、研究デザイン、分析手法では解明できない部分も出現する。統計ソフトウェアを用いた検定で有意な値が出るかどうか量的に測定するだけでは、教育や学習の成果と価値を適切に理解し解明するには不十分であり、質的側面も同等の重みで検討する必要がある。しかし、主観のみに基づく印象をまとめて記述するだけでは科学的手法として不適切であり、恣意的な思い込みの域を出ない。より正確で適切な検証のためには、混合研究法を取り入れ、それによっていかに明確な過程に基づき理解し、結果を解釈し、成果を表現するか、再現性、妥当性、信頼性に配慮した手法を検討していくことが有効である。本稿で採用した混合研究法の統合的解釈の手法は発展の途上にあり、方法論として確立された段階にはまだないが、様々な方法論を検討する上で、中国語教育・学習の実践研究における、特に学習者の学びの質的側面に対する理解と解釈を深化するための有益な方略のひとつとなるだろう。

**参考文献**

Creswell, J.W. 2015. *A Concise Introduction to Mixed Methods Research*, Thousand Oaks, CA : Sage.

大谷尚2008.4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCATの提案―着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続，『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』54(2)：27-44頁

大谷尚2011.SCAT: Steps for Coding and Theorization―明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法，『感性工

学』10(3)：155-160頁
城間真理子2013.コミュニケーション力と協働力の育成をめざして―高校中国語教育での実践報告，『中国語教育』11：33-45頁
杉江聡子2016.中国語ブレンド型学習の実践と混合研究法による評価―遠隔交流が創る学びの経験を学習者視点で解釈する，北海道大学大学院国際広報メディア･観光学院平成28年度博士学位論文
砂岡和子2009.ミス・コミュニケーション学習支援プログラムの開発，『平成19年～平成21年度科学研究費補助金 基盤研究（B）（課題番号：19320087）研究成果報告書』東京：早稲田大学政治経済学術院，doi:http://www.f.waseda.jp/ksunaoka/misscommunication/
砂岡和子2011.チャット投稿の質量と語学習得効果―テキストチャットを利用した中国語教室授業，『2010年度ICT授業実践報告書』：139-146頁

付録　SCATによる分析プロセスと内容の例（問3の自由記述を対象とした質的データ分析）

| 番号 | 発話者 | テクスト | <1>テクスト中の注目すべき語句 | <2>テクスト中の語句の言いかえ | <3>左を説明するようなテクスト外の概念 | <4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して） | <5>疑問・課題 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 日本側 | 交流することで学習に対するモチベーションがあがる。<br>色々な意見も聞けるし、知らない単語とか表現が毎回聞けるので自分の為になってるとおもったので。<br>もっといろいろなことを中国語で話せるようになりたいと思うし、伝わったときに自信が持ててやる気が出るのでよかったです。<br>交流はとても楽しかったし、中国語をもっと勉強したいという意欲がさらにわいたからです。<br>言っていることが全然理解できなくて、そして話すこともできなくてへこむけど、笑顔だけで楽しいです。<br>難しかったけど自分の中国語が少しでも通じて嬉しかったから。<br>自分の勉強不足を痛感する場面もあるけど交流することは楽しいしやりがいを感じるから。 | 交流、学習のモチベーション向上<br>色々な意見を聞ける、知らない単語・表現が聞ける、ためになる、いろいろなことを中国語で話したい、伝わる、自信が持てる、楽しい、中国語、もっと勉強したい、相手の話が理解できない、話すことができない、笑顔、難しい、自分の中国語、少しでも通じる、嬉しい、勉強不足を痛感する、やりがいを感じる | インタラクション、学習意欲が上がる、多様な考えを知る、新出単語・文を知る、役に立つ、豊富な話題について中国語会話する、コミュニケーションがとれる、不安がない、愉快、交流相手の言語、学習を努力する、中国語が聞き取れない、笑った表情、困難、日本人学習者の話す中国語、部分的にコミュニケーションが成立する、満足、実力のなさを実感する、挑戦に値する | 毎回の遠隔交流で相手が変わる<br>1回の遠隔交流でもセッションごとに相手が変わる<br>原則的に中国語での対話が持続されるよう教師がコントロール<br>場合によっては日本語も使用<br>中国語コミュニケーションが困難な時は中国側がゆっくり話したり言い直したり配慮してくれた<br>日本側の中国語の上手い下手にかかわらず中国側は理解しようと努力し友好的な態度を維持 | 新しい知識や語句の獲得<br>実践的な会話表現の活用<br>交流の喜びや楽しみ<br>自信の獲得<br>中国語学習のモチベーション向上<br>コミュニケーションの困難<br>知識と技能の不足を認識、反省<br>コミュニケーション失敗のショック<br>課題克服の喜び<br>少ない資源を最大限活用してコミュニケーションが成立する喜び | 何について言っていることが理解できなかった・話すことができなかったのか？<br>どのような場面で自分の勉強不足を痛感したのか？ |
| 2 | 中国側 | 了解另一个地方同龄人的生活很有意思。希望日语口语更加流利。<br>更直观，印象深刻。能够提高学习兴趣。增进认识和了解。想提高会话能力。希望能够准确恰当的表达自己想表达的意思。<br>交流本身就是一件有意思的事。<br>平时主要是和外教交流，上下级的意识比较明显，但是和日本的学生交流有亲近感。能够更准确地表达自己想要说的内容。<br>能通过视频看到对方很有真实感。自如的运用日语进行交流，用准确的词汇标的自己的想法。<br>很可爱，话题也很轻松。更加流利的交流。<br>可以及时了解不同国家 不同文化同龄人之间的想法。 | 了解，另一个地方，同龄人的生活，有意思，日语口语，更加流利，直观，印象深刻，提高学习兴趣，增进认识和了解，提高会话能力，准确恰当的表达自己想表达的意思，交流本身，平时，和外教交流，下级的意识，明显，和日本的学生交流，亲近感，准确地表达自己想要说的内容，通过视频看到对方，真实感，自如的运用日语，交流，准确的词汇，表达的自己的想法，可爱，话题，轻松，流利的交流，及时了解，不同国家，不同文化，同龄人之间的想法 | 知る、別の場所、同年代の生活、面白い、日本語会話、更に流暢に、直観的、印象深い、学習意欲の向上、認識と理解を深める、会話能力の向上、自分の言いたいことを適切に表現する、交流そのもの、普段、外国人講師と交流、（上下関係において）下の立場という意識、明らか、日本の学生と交流、親近感、自分の話したい内容を正確に表現する、ビデオチャットを通じて相手を見る、交流、正確な語彙、自分の考えを表現する、可愛い、話題、気楽、円滑な交流、即時に理解する、異なる国、異なる文化、同年代の考え方 | 日本側はBLを構成する3つの学習形態の1つとして遠隔交流に参加<br>中国側は遠隔交流のみに参加<br>QQまたはSkypeを使用したビデオチャットを中心に、音声・テキストチャットを補助的に使用して同期型交流<br>中国側の大学には日常的に接触する留学生がいない<br>中国側の大学には中国人講師と日本人師がいる<br>日本側の高校には中国人講師がおらず日本人講師のみ | 同年代の日本人の生活に対する興味関心<br>日本側に対する好印象と親近感の向上<br>ビデオチャットに対する新鮮な喜び<br>リアリティのある交流<br>気楽なトピック<br>中国に大学における教師と学生の上下関係の厳しさ<br>日本語会話能力向上に対する意欲<br>流暢な日本語運用技能習得に対する意欲<br>日本語学習モチベーション向上 | 中国側は日本語科目としてどのような授業を履修しているのか？講師は厳しくプレッシャーが大きいのか？日本人講師が担当する科目と内容はどのようなものか？学外で日本人の若者と接する機会はあるか？ |

| | |
|---|---|
| **ストーリーライン（現時点で言えること）** | 日本側の学習者は、知識や技能不足によるコミュニケーションの困難を実感し、時にコミュニケーション失敗のショックを感じてへこむことがあり、うまくコミュニケーションできるかどうかわからない状況に緊張や不安を感じた。しかし同時に、相手に自分たちのことをもっとうまく伝えたいという気持ちから知識や技能の習得に対する向上心を高め、真正なコミュニケーション場面における適度な緊張感を持って交流を重ねることで、課題克服の喜びや少ない資源を最大限活用してコミュニケーションが成立する喜びを感じた。コミュニケーションの困難を感じ、失敗にショックを受けてもそこで立ち止まらず、次への課題克服や学習モチベーションの向上へうまく転化させた。 |
| | 中国側の学習者は、遠隔交流というリアリティのある交流を経験することで、日本語会話能力向上や流暢な日本語運用技能習得に対する意欲が高まり、日本語学習モチベーションが向上した。また、ビデオチャットに対する新鮮な喜びを感じると共に、日本側に対する好印象と親近感が向上し、同年代の日本人の生活に対する興味関心も深まった。日常的に中国に大学における教師と学生の上下関係の厳しさの下で学習しているため、同年代どうし気楽なトピックについて話せる環境に満足した。 |
| **理論記述** | 日本側は、遠隔交流の機会を喜び、対話を楽しみ、遠隔交流の経験を蓄積する中で新しい知識や語句を獲得し、実践的な会話表現を活用して自信を獲得した。同時に、中国語コミュニケーションに対する不安や緊張があり、失敗経験を経て知識と技能の不足を痛感し、課題克服に向けた反省が生まれた。成功と失敗の両方が中国語学習のモチベーション向上につながった。 |
| | 中国側は、遠隔交流を通じて、日本語運用技能の向上を目標化し、モチベーションが向上した。ビデオチャット交流は新鮮な体験であり、日本に対するポジティブな感情と興味が高まった。上下関係を感じない気楽さも功を奏した。 |
| **さらに追究すべき点・課題** | 何について言っていることが理解できなかった・話すことができなかったのか？どのような場面で自分の勉強不足を痛感したのか？ |
| | 中国側は日本語科目としてどのような授業を履修しているのか？講師は厳しくプレッシャーが大きいのか？日本人講師が担当する科目と内容はどのようなものか？学外で日本人の若者と接する機会はあるか？ |

**SCAT(Steps for Coding and Theorization)を使った質的データ分析**

SCAT WEB site からのダウンロードフォーム scatform1.xls http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/scatform1.xls